



町民文芸

只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

玄関に散らばる落葉そのままに病みつぐ義姉の看取りに向かふ

古川 英子

馬場 八智

年どしに病む友や臥す人をりて賀状の数の減りゆく寂し

小倉キミ子

小春日に朽ちし枝落とす大胡桃見上げる枝に冬芽の萌す

新国由紀子

臍癌の従兄の入院案ずれど遠く住みゐる我はずべなし

関谷登美子

研修に隣り町なる金山の八景巡る説明は生く

渡部ゆき子

健康が自慢と言ひし日も遠く薬の数の次第に増える

目黒 富子

刈り取らず未枯れし蕎麦の茎赤く雪が間近の畑を彩る

渡部ヨリ子

亡き母に似てきたと言はれる事多くなりていつしかその歳を越す

新国 洋子

久びさに施設を訪へばいち早くわれを見つけて姉は駆け寄る

(出詠順)

只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

垂れし枝潜り選んで林檎狩

礼

冬の日や笑いこぼるる子供客

添え文の長々となり日短

順子

小春日や箆笥は母の匂ひして

雪婆遊具離るる子へ寄りて

おのが背に右往左往の雪ぼたる

修一

落葉や走りすぎ行く女子生徒

段取りを言い争いて大根引く

冬服の襟をすぼめて駅ホーム

一穂

風花や喜寿の祝に初曾孫

会津縞ゆっこぎを裁つ囲炉裏端

長老の三本メや忘年会

吉児

土津神奥津城鎮む初菫

俳友の白寿祝や初座敷

曾孫の産声を待つ松の内

恒夫

幼き日ケーキなき家庭のクリスマス

信

日向ぼこ猫も夢見る散歩道

小春日やマラソン人が追い抜きぬ

都

長グツを履いては脱いで秋探し

冬困う胸算用で縄計る

残菊や畑の隅に黄の光り

洋子

三度程野に降りたれば寝雪らし

年毎に守りし馳走大晦日

納豆寝せよーぐ寝だべど起し見る

味代子

声高に手順伝える冬仕度

冬来る山は拒まず静かなり

抱えこみみかん畑でほうばりて

恒夫

茶の花やすとんと落ちる江戸落語

ひと仕事終えたるあとの返り花

ジンギスカン鍋と村びと愛しけり

恒夫